

選択をいう。入園後間もない時期に多いのは、最初の交友選択に當って、近隣の持つ影響の大であることがわかる。その後園生活に馴れるにつれて交友範囲が広がるので減少しているが、卒業時にはまた増加している。このことは卒業時に當って近隣によるまとまりがはっきりしてきたからだと思われる。

テーブルで第一年目、三学期の選択が大幅に増えているのは、定められた各テーブルの範囲内で自由に席をとらせたためと思われる。

整列の順序では直前、直後の関係が最も多く三七・二%を占めている。以下一人、二人、三人おいた関係の順となっている。一人、二人、三人置いた関係でも、その間に欠席児があると直前、直後の関係となることもあり、このような機会に交友関係が生ずると思われる。自然選択とは上記の環境に左右されない関係で全体の約半数を占めている。比較的知能の高い子ども、実際には遊んでいないが遊びたいと願っている子ども、性格の共通する比較のおとなしい子どもなどが2年間に渡ってみられる。

結 び

テーブルや整列によって交友関係が左右されたのは全体の約4%であった。これらは主として遊びに加われない性格の弱い子ども、その他友達の出来ない非社交的な子どもにも多くみられた。したがってそれらの子どもには適切な保育環境を与えることによって選択を容易にさせることが出来るのである。事実テーブルの坐り方や整列の順序を考慮したことによって交友関係を広め且つ深めていった子ども達は、それによって園生活を一層楽しむようになった。しかしながら、保育環境を無作為的に換えただけではよりよき成果を期待することは不可能であろう。交友の選択にとって適切な保育環境は保育中の綿密な観察と共に家庭との協力に基づいて作られるものであり、

園児の円満な成長もこのような環境のもとに育成されるものと思ふ。
(大会抄録98~102頁)

幼児の両性集団について

広島・やわらぎ学園 樋口三紀子

保育所における幼児の行動を観察すると、殆んどの場合、彼らは集団を形成している。その集団には男児のみ、或いは女児のみによって構成された同性集団と、男女混合によって構成された両性集団とがある。このことはすでに本誌にも報告した通りである。今回は男女児混合による両性集団の組成及びその動態について観察結果を報告する。

I 自由遊びの時間にみられる幼児の両性集団について

- (1) 幼児が両性集団を構成する率は大体四五%前後である。
- (2) これらの両性集団は普通3~4人位の幼児によって構成され、著しい場合一人集団までみられた。
- (3) 両性集団の性的組成は、年長女児と年少男児との結びつきが最も多く、次いで年長男児と年少女児によるものであり、同年令の界女児の結びつきはきわめて少ない。
- (4) 両性集団と遊びとの関係を調べると、両性集団は協力性を必要とする遊びには少なく、個別的な遊びに多くみられた。これは同性集団の場合と全く逆の傾向を示すものである。

II 室内における同年令男女児のテーブル集団について

- (1) テーブル集団の性的組成は、どのテーブルにおいても観察の

度ごとに変化していた。一般にテーブル集団は、同性のみによって構成されているもの五三%前後、両性によって構成されているもの七%前後であった。このように同年令の男女児の間に多くの両性集団がつくられたことは自由遊び時において殆んどみることでできなかった現象である。

(2) テーブル集団における個々の幼児の結びつきを調べると、比較的強い結びつきを示すものは、いずれも同性によるもので、両性による結びつきは全くみられなかった。これらの事実からテーブル集団においてみられた多くの両性集団は、強い結びつきを示す男女各同性小集団が一つのテーブルにいくつか寄り集まって構成されたものと考えることができる。

Ⅲ 室内における特定制約下のテーブル集団について

前述のように、室内における自由テーブル集団は、両性によるものが相当数あるにもかかわらず、両性の結びつきはきわめて弱い。そこで、同性の強固な結びつきを示す小集団を崩すようにし、男女児を結びつけるように席につかせ、両性の結合力がどの程度高まるかについて調べてみた。すなわち、幼児のテーブルにおける席を指定し、一日一回だけそこにつかせ、後は自由に席を選ばせた。このような条件のもとに二週間毎日彼らの選ぶ席を調査し、これら特定制約下におけるテーブルに集団の性的組成の変化を観察した。その結果は次の通りである。

(1) 特定制約下におけるテーブル自由集団を調べると、両性集団の構成率は七八%前後で非常に高く、個々の結びつきについても両性による比較的強い結びつきが認められた。この現象は、自由テーブル集団においてはみられなかったものである。そこで、この点について更に追求してみた。

(2) 前述の特定制約下におけるテーブル集団が室外自由遊びに移った場合、個々の結びつきがどのように変化するか観察してみた。その結果、自由遊びに移った場合の個々の結びつきは、同性におけるものが殆んどであり、両性によるものはきわめて少ない。この事実から、特定制約下のテーブル集団でみられた両性間の強い結びつきは、両性間の引き合いによるものではなく、指定された席への執着心由来するものと考えられる。

Ⅳ 同年令の集団に入れない幼児

更に同年令の集団の中で結びつきの弱い幼児の行動を観察してみると、彼らは自由遊び時において、年少男女児と集団を構成する傾向が強い。このことは両性集団の本質を理解する上に重要な意味をもつものと思える。

まとめ

以上のように、保育所内においてみられる幼児の両性集団は、優位の幼児たちによって構成されるものである。殆んどなく、一般に劣位にある幼児によって構成されるものである。すなわち、同年令の集団に入れないような幼児が年少の異性と結びついた結果生ずるものが殆んどであって、その他の場合にみられる両性集団は、何らかの制約にもとづく見かけ上のものである。したがって、自由遊び時における両性集団の扱い方には、同性集団とはことなる考慮がはらわれなければならない。同性集団と両性集団との関係は或る意味においては、優位集団と劣位集団との関係にあり、これらの各集団の扱い方は、保育上きわめて重要な問題になるものと思う。また、室内のテーブル集団に多くみられるいわゆる見かけ上の両性集団についても、私達はその本質をよく理解した上で保育にたずさわるべきだと思ふ。